

このまち文学館 「厚狭の武士の復讐譚」



洞玄寺（厚狭毛利家菩提寺）

『伽婢子（おとぎぼうこ）』第十二巻（918/シ/75 新日本古典文学大系75）の「厚狭応報」に、次のような件があります。

**「長門の国の住人厚狭弾正なにがしといふもの（略）甲冑をたいし、
鹿毛の馬に乗り、真っ先に進み、陶を馬より突き落とせしー」**

この内容をいまの言葉にして要約すると、以下のようになります。大内義隆の家老・陶晴賢が、主君を討って山口の城を奪い取った。義隆に恩義のある厚狭弾正が城を取り戻すために攻め入ったがこれも殺害された。しかし厚狭氏は亡霊となったのちに陶氏に憑りついて敵を討った。

『伽婢子』は江戸時代（1666 年 寛文 6 年）に浅井了意によって書かれた仮名草子です。この本は中国の怪異小説集『剪灯新話』の中の話を、類似した日本の歴史物語に置き換えてまとめたもので、その面白さと読みやすさから、出版された当時はよく売れ、広く庶民に親しまれました。

厚狭弾正なる人物は架空の存在ですが、厚狭（あっさ）という苗字は旧山陽町の地名の厚狭から採られたものです。忠義の武士の名前がわが町の名に因むというのも、ちょっと面白い話ですね。

（文：香川真澄）